

みんなの童話

太陽がいつぱい



梅雨が明けると、太陽がきらきらと照りはじめた。ぼくらは、海に向かって大きく息を吸いこんだ。

「潮のにおいがするね」

「見ろよ。海の上がきらきらして、光って見えるぞ」

「広い海のごとくまでも、太陽がいつぱい降りそそいでいる」

ぼくらは口々に言い合った。

「暑い夏がやってきたな」

ぼくは、空をもういちど見た。

空が青い。その中から陽のひかりがきらきらと光っていた。

「空から光のしずくが落ちてくるみたいだ」

と声を出してから、大きく息を吸い込んだ。

よしおは、肩で息を切りし、汗をかいていた。

「夏はきびしいだ。暑くて汗が出る」

そう言って、深呼吸をした。

「よしおは、よしおだけに話すけど、笑わないでくれるか」

「急になんだよ。あらたまって」

よしおは、すこし不満顔をした。「前から、太陽ってき。金の馬車を走らせていると、おもっていた」

「太陽が？」

「日の出から日の入りまで、金の馬車で、きらきら光るひかりの粉を、みんなにふりまいている」

「なんで」

「夏になると、ひかりも陽射しも輝いているように思うからな」

「お前なら、そう想つたらうな」

ぼくは、砂浜の草を指さした。

「よしお、見てみるよ。草が光って見えるぞ」

「まだ、朝つゆがあるからな」

「きれいだ。ぼくは夏の陽射がいちばん好きだ」

ぼくは、梅雨が明けたら、よしおといっしょに見よう、朝の海にやってきました。

「よしお、もつひとつ見せたいものがある」

ぼくは、そう言うてから、海を

「いまから川を上っていい」

よしおは、ぼくのそとにびっくりしてぼくをのぞきこんだ。

「どこまで続いているのかわからないぞ」

よしおは不安そうに、口もる。「大好きなところがある。行ってみようぜ」

ぼくは、夏休み前から、よしおと、夏のひかりを探しに行こうと、思っていた。

「そうだな。夏休みだからな」

よしおもつなずいた。

ぼくらは、からだ中に太陽のひかりを、いつぱい浴びていた。

背によしおを見た。

「いまから川を上っていい」

よしおは、ぼくのそとにびっくりしてぼくをのぞきこんだ。

「どこまで続いているのかわからないぞ」

よしおは不安そうに、口もる。「大好きなところがある。行ってみようぜ」

ぼくは、夏休み前から、よしおと、夏のひかりを探しに行こうと、思っていた。

「そうだな。夏休みだからな」

よしおもつなずいた。

ぼくらは、からだ中に太陽のひかりを、いつぱい浴びていた。

「川のさざなみが、流れに沿ってきらきら光っているのがいいな」

と、ぼくは指差した。

「魚がきらきら光って見えるよ」

また、指さした。

「魚だけじゃないよ。水草だって、沢力二だって、光って見えるよ」

ぼくは、しゃがんで水草をさわって見た。

それから、ぼくらは、川に沿って二人だけの行進をした。

「家の屋根だって光って見える」

と言ってぼくは、二、三軒向いの家を指さした。

「屋根のかわら一枚一枚が、陽に

さらされて光っている」

「道を守る車も光って見えるな」

「太陽から、光のしずくが落ちてくるよ」

「太陽を浴びると、みんなきらきらしている」

そう言って、よしおはぼくの肩に手をかけた。

しばらく行くと、増えていた家もまばらになってきた。川幅も少しずつ、狭くなっていった。

「この橋も渡ろう」

橋のらんかんも光って見えた。川は小川になり、道のまわりには木が増え、登りにさしかかっていた。

「もうすぐ山道だよ」

「ぼくの大好きな丘を目指すぞ」

「お前の好きな丘！」

山道は、陽も届かぬほど薄暗く、石がごろごろしていた。

「気を付けるよ」

ぼくはよしおをかばって歩くと、いつきに森が開けた。

「わああ。太陽の光がまじかだ」

ぼくらは、丘の上で、太陽のひかりをめいつぱい浴びていた。

「おやま会員 かぐい まい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい

かぐい